



2

父の好物 食べたい時に

「写真」は、多くのがん患者を自宅で見とっている。「末期がんででも家で診てくれるお医者さんがいるなんて、



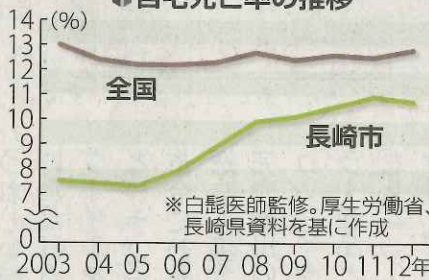
夫の闘病でお世話になるまで知りませんでした」と野坂さん。

五島で漁師をしていた清造さんは大腸がんが見つかったのは05年。大病院で手術を受けたが、その後がんの再発が見つかった。骨などにも転移し、本格的な緩和ケアが必要となった09年7月、「最期は病院ではなく自宅で過ごしたい」との父の希望に応え、母と一緒に長崎市の家へ呼び寄せた。

夫の主治医である同市の白髭内科医院院長、白髭豊さん

野坂さんは5人姉妹。東京や大阪に住む姉たちが、交代で泊まり込んで、父の世話を

◆自宅死亡率の推移



食事は「日一食がやっとだったが、栄養剤の点滴はせず、「好きなものを、食べたい時に、食べたいだけ食べればいい」との白髭さんのアドバイスで、カツオやマグロの刺し身や手まりずしを、大好きな焼酎とともに口にしました。

でも家族にとっても、一番理想の形だったかな」と野坂さんは振り返る。国の調査では、5割以上の人が自宅での最期を望んでいる。だが、白髭さんが「長崎在宅Drネット」を発足させた03年当時、長崎市の自宅死亡率は7%台で、全国平均と比べても半分程度だった。地域の病床数が多いことなどが理由とみられるが、病院から在宅医への連携の仕組みを作ったことで、12年には約11%にまで増えた。

への流れができつつある」と白髭さんは話す。登録された患者の約7割がんで、自宅で見とるケースも多い。長崎市の女性(62)は進行した卵巣がんで1年ほど入院を繰り返した後、「家に帰りたい」と14年5月、在宅療養に移った。6月半ばはちょうど次男の結婚式。病院にいた時には考えもしなかった結婚式への出席が、白髭さんや看護師、介護スタッフが付き添うことで実現した。「母はとても感謝していました」と同居の長女(28)は話す。女性は自宅で3人の子どもたちに見守られながら静かに息を引き取った。結婚式に出席した10日後だった。(編集委員・田村良彦) 次回は20日に掲載します